



「バンコク日本人会子ども図書館」創設と専業主婦達

～アンペイドワーク(無償労働)の狭間の人々～

杉本 浩子(Amelie'10)

2020年総務省発行の広報誌「共同参画」の巻頭文にこんな言葉がありました。

「…性別役割分業規範のもとで家事は女性の責任とされたため、女性の社会進出は遅れました。今後の女性の経済自立と社会的活躍の為には、男性も家事の責任を分かち合うことが不可欠です。」と。日本国内の男女を対象とした、共同参画の状況が遅々として進まないと憂いている男性の言葉を載せざるを得なかったのを思い出します。

遡る事40年、日本の経済活動が海外拠点展開へと加速されていた頃、海外勤務となった夫に伴われ赴任生活に舵を切った主婦達のお話しをします。同伴者というだけではワーキングビザは発行されないなどの国際事情で、帯同される“仕事を持っていた女性”は離職するしか選択肢がなかったことです。

もちろん単身赴任といって、家族を日本に残したまま海外外向する父親もいたはずですが。私達はそうした家族内の結論を、人其々だからしかたのない事として、しかし複雑な気持ちでいたのを覚えています。

私は3才と6ヶ月の子供を伴って、タイ国バンコク市で一度目の赴任生活を送りました。一度日本に戻った後、2年後に二度目の5年間のバンコク市生活が追加されました。家族には三人目が加わり一家5人の海外生活が2000年まで計10年続くこととなりました。

表題に記した「バンコク日本人会子ども図書館」創設の話は2度目の赴任時の事です。2千人以上の子供が通学していた日本人学校には学校図書館が併設されており、バス通学していた小中学校生と年長児童の子供たちは毎週のように、新しい本との出会いの機会がありました。

しかし、もっと小さな子供たちにはその機会はなく、若い母親達はなんとかしたいと熱望していました。私の1回目赴任時と比べると、日本での仕事を諦めて家族そろっての赴任を決めた共働き世帯の母親は多かったようです。その母親達は、数の上でもスキルの面でも昔を上まわっていました。日本でも女性活躍に舵を切り、国内で徐々に進めていたということを知ったのは帰国後でした。

さて、母親たちは、日本人が多く住む地域で新しい私設図書館を作ろうと動きました。日本人会の許可を得てから、支持団体への協力依頼や企業への寄付依頼まで、今までにない展開がありました。普通の主婦だけで終わりたくない人々の背中を後押し、新規の場所探し、建築士による書棚の設計、コンセプトの作成、ニックネームやロゴマーク作り、広報誌の発行と進みます。もちろん貸出体制においても、司書資格を持ったメンバーがリーダーシップをとって体制を整えました。当時のボランティアメンバーがこの時の話を、ブログに纏めてくれています。「たんぽぽ日和」をぜひ検索してみてください。

何より凄かったのは、まだ東南アジアには定着していなかった図書館の文化を、普通に日本人が持っていた事です。この図書館は、やがてタイでの児童書の発展にも一役買い、後にタイの学生たちが「子ども図書館」を訪問することになった時、日本的図書館文化を紹介するのにとても良い場所になりました。

“これって起業に近いかも”という思いを持ったのは本帰国して、男女共同参画推進の話を聞いてからでした。そして2010年人材育成セミナーへのレポートを書き、セミナー受講生となりました。

もう一つの気づきの話をします。バンコクでは家事はアウトソーシングができペイドワークと認められていま



バンコク 日本人会子ども図書館

した。主婦だった女性達は、異文化生活のストレスを短時間で解消するために語学学校に出かけます。代わって、アヤさんと呼ばれる彼女たちは掃除、洗濯、アイロンがけから食品の買い出しまで行います。長い歴史の中で、タイでは一軒に一人を契約することが多かった職種ですが、近年はパートタイムで何軒も掛け持ちする人もいます。なぜなら、日本人にとって、ダスキンに台所の換気扇の掃除を依頼するように、短時間労働契約のほうが、馴染んだ雇用体系だと今になって気が付きました。このように家事をアウトソーシングした女性達だったからこそ、子ども図書館を生み出すことができたとも言えます。日本社会では、これまで全く家事に関心なかった男性もいます。夫婦内で家事を分担しあうだけでは、十分になるまでには時間がかかるのです。そこを早急に埋めていくシステムが必要です。これまで話したように、子どもの環境を良くしたいという熱意、家事労働以外で可能性を追究したいというエネルギーを持っている女性達の活躍を本当に推進したいのならば、働く女性の声を聴いて、足りない部分を埋めていく必要があるはずです。保育園の数を増やすだけでなく保育園の受入システムの簡素化、母親しか想定していない検診会場の変更など、父親参加をベースにすることは必須です。1人親世帯にも、非課税世帯にも課税世帯にも同じように支援は必要なはず。特に少子化を憂えている日本社会において、子育て応援を、人の力で変え、考え方を考える事や新しい形を許容する社会でなくては、未来は明るくなるはずありません。

どこを変えるのかって？

経済誘導型の三本の矢も大切かもしれません。でも、隣を出し抜く経済でいいのでしょうか？

きちんとNOの言える日本であるために、其々が襟を正していかななくてはならないでしょう。

さて話を戻して、人材育成セミナーの卒業時に考えた2020年度生のグループ名はフランス映画からとった「Amelie'10」です。様々な世代がつくるグループですが、自分らしく自分の道をゆくグループにぴったりの名前です。今でも同期で連絡を取り合っており、お互いに良い刺激をもらっています。そしてその卒業生が、さらに活動を続ける場所がこの交流ネット会議、交流ネット通信です。

皆さん時間をつくって是非のぞいてみてください！！

2023年度ウィルあいち交流ネット学習会 1

金森 淑英(ベリーズ 18)

今年度のテーマ「べき論はやめや〜」。私たちの生活の中に多々ある『べき』。

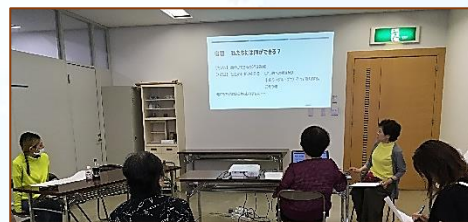
これに無意識のうちに縛られていないか。生きづらさを感じ、自分らしさを失ってはいないかを改めて考えてみる機会をつくっていくこととしました。

最初に取り組むことにしたのが『子育てに潜む“べき”』。現在日本では『少子高齢化』が急速に進んでいます。政府は様々な方策を打ちだし、地方行政においても同様にプランが作られ実行されています。しかし、少子化に歯止めがかかることはありません。少子化の原因には①結婚しない率の上昇②晩婚化による初産年齢の上昇(第2子、第3子が誕生する確率の減少)③子育てにかかる費用の増大などがあげられています。しかし、それだけではない何かがあるはず。そこでアンケート実施と、生の声を聞くために現役パパ・ママを囲んでの座談会を学習会として実施しよう！ということになったのでした。

まず、子育て・孫育て真っ只中の世代の男女にアンケートを実施しました。項目として①子どもをもってよかったこと②子どもをもっていたいへんだったこと③家庭内の役割分担④子育て中やりにくかったこと⑤理想の社会を挙げました。

約40名の方々に様々なご意見を頂きました。アンケート結果の分析と報告は12月に行われる“ウィルあいちフェスタ”でさせていただきます。

当日ご参加いただいたファミリーはもうすぐ3歳のお子さんをお持ちの桂川将典さん、織江さん。お子さんも一緒に参加してくださいました。私がまず『そうだね…』と自分の中の“べき”を突きつけられたのは3歳の彼女の言動でした。「パパ！本読んで」「パパと一緒にがいい！」「パパ、おしっこ」お願いする、呼ぶ人が『パパ』なのです。日頃からの関わりのなせる結果です。それを裏付けるようにアンケート結果でも小学生以下のお子さんがある家庭の約半数が『家庭内において家事・子育ての役割分担はない』と回答しています。座談会の中で将典さんが話されたようにパパが育児に参加をすることは当たり前になっても『夫も妻も時間に余裕がない』。これはすべての根源にある大事なポイント。時間を産み出すにはどんな“べき”を取り除いたらよいでしょう。織江さんが話された『採用面接のときには結婚指輪を外して…』も“べき”論の最たるものでした。



“べき論”という壁に阻まれつつ成長し、就職・結婚・子育てをしてきた私たち世代だからこそ表に出てこない解決の糸口に近づけるのでは？と思っています。

桂川将典氏の感想

今回は現役子育て世代としてお話しする機会をいただき、ありがとうございます。

早速ですが、我が家では育児担当は父親です。コロナ禍に産まれたということもあり在宅時間も多く、また市議会議員という立場からも、育児の実感を得ることが重要だとして、育児は父が主体でやることを夫婦で話し合って決めました。粉ミルクにおむつ替えそのほか、あらゆることを新生児期からずっとやってきました。会議以外の外出ならどこでも子連れで行くようにしていましたが、子連れの不自由さ・不便さによって、いつの間にか行動範囲が萎縮していることによく気づきました。なお現在は超おしゃべりで活発な3歳児へと成長し、毎日が戦場です。私は体力もストレスもずっとギリギリの中で、たまにある仕事の出張が息抜きになっているような状況です。



さて、共働き世帯が主流となっている日本社会では、育児・家事の分担のほとんどを母親が引き受けています。父親の分担率は微増傾向になっているものの、いまだに昭和の家庭像を色濃く引きずっている日本人の常識を変えていく必要があります。また実際に子育てしていると「私たちの若い頃は…」「お母さんだから…」とアドバイスのつもりで声をかけてくる親族友人知人がいますが、無意識の偏見や思い込み(アンコンシャス・バイアス)でイラッとさせられることも多々あります。特に我が家では育児主体は父ですから、お母さんはどうしているの？と訊かれることが良くあります。母親が育児していて、お父さんはどうしているの？と訊かれたことは一度もありません。まさに性別で役割分担が固定化された視点での一言です。そんな時は余計な口を出すよりも、あらあら大丈夫？手伝おうか？と助けの手を差し伸べる、そんな一言の声掛けが何よりもありがたいと日々感じています。

具体的な活動については、身近なところで行政の子ども・子育て支援は本当に充分なのか、しっかりと検証することがやりやすいでしょう。例として挙げたのは、公共施設でのおむつ替えとおむつ処分がどこでも当たり前ができる環境かどうかのチェックです。多目的トイレにおむつ替え台があるかないか、という程度です。大手ショッピングモールの充実度のほうが遥かに高い。こうした細かい積み重ねをコツコツ推進することも、男女ともに育児しやすい男女共同参画社会づくりにつながるのではないのでしょうか。

ウィルあいち交流ネット通信は、県下全域の男女共同参画社会推進活動の交流のため、会内外の情報を提供しています。今号は愛知県女性地域実践活動交流協議会(愛知女性連携フォーラム会員)からの寄稿です。

2022年度愛知県市町村男女共同参画アンケート調査

2022年度愛知県女性地域実践活動交流協議会会長・海部津島女性の会会長 鈴木 みどり

2022年度の愛知県女性地域実践活動交流協議会では、本来なら男女共同参画フォーラム等を開催することになっていましたが、コロナウイルス感染症がまだ5類に移行する前だったことや、ウィルあいちの天井工事事も重なり、何もできない状況でした。そんな中「地域開発みちの会」から、活動として「ジェンダーに関するアンケートを取る」と発言があったので、それならば地域実践として皆で協力しようと話しがまとまりました。

話し合いの中で、大変かもしれないが愛知県54市町村すべてを対象にアンケートを取ることにしました。

テーマは「ジェンダー平等に関するアンケート」。目的はジェンダー平等の実現に向けて、愛知県市町村における男女共同参画施策、取り組みの現状把握。項目として15項目。活動拠点から男女共同参画基本計画・条例、また行政職員への周知や教育現場におけるジェンダー平等など、様々な角度からアンケートをとりました。期間として2022年10月3日～12月15日としました。54市町村ともなれば会員がいない地域も多く、直接担当部署に電話をし、メールアドレスをお聞きしました。そして、それぞれの自治体にアンケート用紙を配信しました。各市町村担当の方は皆さんには快く協力して頂きました。



提言書を副知事に提出

その結果を提言書にして、大村愛知県知事にお渡しすることができました。

女性地域実践活動交流協議会が、毎年行ってきた行事はできませんでしたが、中身の濃い調査ができたと思います。コロナ禍だからこそできた活動でした。私たちが次世代に繋いでいく持続可能な活動、それにより誰もが暮らしやすい社会を作る一助になればと思います。

アンケート調査を行なって

同副会長 2022 年度地域開発みちの会会長 森 紀代美(Reiwa'19)

地域開発みちの会では、全体テーマとして 2 年間「性差別をなくすために私たちは何ができるか」を考え、上野千鶴子氏の講演、萩原なつこ氏の講演、岡村晴美氏の講演を行い、私たちは深く啓蒙され、それぞれに自分のできることを考え、行動しました。3 年目となる 2022 年度は、個人レベルではなく、みちの会全体として「行動する」ことを目標にしたいと、全体テーマを「性差別をなくすために私たちは行動する」としました。

「行動する」とは具体的に何をするかですが、改善を求めたいことについて、次のように行おうと考えました。

①確実なデータを得るために調査をする。→②データを分析して提言書を作成する。→③さまざまな方法で行政に働きかける。

その究極の目的は、ジェンダー平等に関する施策の優先順位を上げてもらうこと、つまりは、予算と人員配置の拡充です。特に進めてほしい具体的な提案は提言書に書きます。

このような構想で開始したみちの会の取り組みでしたが、愛知県の全市町村のアンケート調査を行うことができたのは、愛知県女性地域実践活動交流協議会として他団体が協力してくれたからです。大勢でまとまれば大きな声になります。このアンケートプロジェクトはなかなか骨の折れる事業でしたが、女性団体がまとまって成し遂げたことは大きな喜びでしたし、力となりました。愛知県にこのような仲間がいることは心強いことです。

愛知県全体のアンケート調査結果は、地域開発みちの会の第 34 回フォーラムで発表し、HP に載せております。<http://www.aichi-michinokai.com/shiryoushitsu/kiroku/r4forum.pdf>

6 団体それぞれのアンケート集計結果は、地域開発みちの会 HP→活動報告→資料→2022 年度ジェンダー平等に関するアンケート アンケート調査用紙・提言書は、以下の HP にあります。

<http://www.aichi-michinokai.com/shiryoushitsu/enquete/r4genderchousakekka.pdf>



フォーラム風景

お知らせ！ 今年もやります ウィルあいちフェスタ名物

＜愛幸さんの占い！！＞

2023年12月9日 10:00～16:00

ウィルあいち3F 特別会議室

ウィルあいち交流ネットは、2001 年ウィルあいちセミナー等の修了生の自主活動グループが結成しまし

さわらび会 / メンズリブ名古屋 / 女性学 '98 の会 / グループキートス / ウィル 2000 / I.W.L / ウィル Do2002 / サーティネット '05 / ベリーズ 18 / Step07 / Fem.'09 / Amelie '10 / ひかるよ '15 / そだね！ 2017 / Hey Say Final / Reiwa'19 / みつ 2020 / リモート 2021 / Women's cup'22

2023 年 9 月発行

編集発行：ウィルあいち交流ネット 協力：(公財)あいち男女共同参画財団